

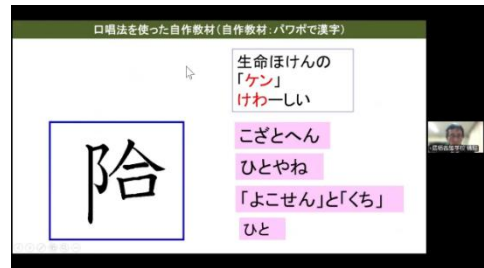
# 視覚障害教育の専門性を、未来へつなぐ

## ー橋詰郁朗先生インタビュー連載に当たってー

北海道札幌視覚支援学校研究研修部

令和8年4月29日に旭川を訪問し、橋詰郁朗先生にインタビューを行わせていただきました。その内容を4回にわたりお届けします。

橋詰先生には、これまで6年間にわたり、本校の初任者及び新転任者研修において、「弱視児の読み書き指導」に関する講義を担当していただきました。この研修は、道内の盲・視覚支援学校への配信に加え、全国の盲・視覚支援学校にも3年間にわたってオンライン若しくはオンデマンドで発信してきました。研修に参加・視聴された先生方からは、視覚認知の視点、多様な学習方法の紹介、子供に合わせていろいろ試してみるものの大切さ、そして「必ずその子に合った指導法がある」という橋詰先生の姿勢に、多くの共感と高い評価が寄せられてきました。



では、そのような専門性は、どのようにして培われてきたのでしょうか。

今回のインタビューで明らかになったのは、橋詰先生の専門性が、旭川盲学校に受け継がれてきた弱視児指導の歴史と実践の蓄積を土台に、ご自身の試行錯誤を重ねる中で形づくられてきたものだということです。そして、特別支援教育への転換を控えた平成14年度から、旭川盲学校において、一時は年間400件に及ぶ教育相談が行われる中で、多くの子供たち、保護者、医療関係者と向き合い、その専門性はさらに磨かれていきました。

現在の盲・視覚支援学校では、かつてのように多くの弱視児のケースを継続的に経験することは難しくなっています。だからこそ、橋詰先生が経験された実践の積み重ね、時代の空気、そして子供と向き合いながら「その子に合う方法」を探し続ける姿勢をお聞きし、共有することには大きな意味があると考えます。

本校では、盲・視覚支援学校の現場に蓄積されてきた専門性を、研修のオンライン・オンデマンド配信、研修動画等のアーカイブ（道視研web「スタバ」）の構築、生成AI・などを活用しながら継承していく取組を進めています。本インタビューは、橋詰先生の専門性の背景を紹介すると同時に、視覚障害教育の専門性を次の世代へつないでいく試みでもあります。

今回「橋詰先生へのインタビュー第1回」をご紹介します。2回以降は、6月29日（月）より、暫時次の本校HP「公開資料」に掲載していきますので、お楽しみください。

<https://www.sapporoshikaku.hokkaido-c.ed.jp/>



### ◆ 橋詰郁朗先生プロフィール

令和8年現在、北海道旭川盲学校に勤務。知的養護学校から平成4年度に旭川盲学校へ赴任。平成14年度より教育相談を担当し、視覚認知指導・弱視児の書字読字支援を専門的に手がける。その功績を評価され、平成22年度には「文部科学大臣優秀教員表彰」を受賞。多くのケースを経験するなかで弱視児の読み書き指導に関する独自のノウハウを蓄積し、研修講師として、北海道内外の盲・視覚支援学校教員への研修・情報発信を続けている。

# 子供と向き合い、現場から生まれた知恵

## —橋詰先生インタビュー—

### 第1回 模索から始まった視覚認知指導

平成14年度、橋詰先生が教育相談に携わり始めたのは、旭川盲学校においてセンター的事業がまさに立ち上がりとしていた時期でした。「何ができるか模索していた」というその頃から、どのようにして読み書き指導の実践が生まれていったのか。第1回は、その出発点をお聞きます。

## 1 「とにかくやってみよう」から始まった教育相談

### 【佐藤】

旭川盲学校で橋詰先生が教育相談に携わり始めた平成14年度は、特別支援教育開始前夜で、センター的事業がこれから始まるという時期でしたね。

### 【橋詰先生】

そうなんです。本当に何ができるか模索していました。ちょうどそのときの校長が、どんどんやってみてという方でした。最初、コーディネーターの持ち時数をゼロにしてくれて。

### 【佐藤】

それ以前は、自立活動部の先生方が、授業を持たずに教材作りをやっていた時期がありました。

### 【橋詰先生】

時間数を減らしてですね。あの頃は能力育成部と言っていました。その教材を作るための時間を確保するために、時数を減らしてやっていましたね。

▶ 「能力育成部」は、自立活動の指導に関する分掌で、帯の時間に子供が視聴し学習する視覚認知に関する映像教材なども作成していました。そこで蓄積された知見が、後の橋詰先生の実践の土台となっていました。

## 2 能力育成部の遺産と「二本柱」の誕生

### 【橋詰先生】

能力育成部で視覚認知の力を育てるということをやっと取り組んでいました。それがあったので、私はその蓄積したものを使い出しました。最初は視覚障害があり視覚認知が育っていないという子供の教育相談を受けていました。継続しているうちに、視覚障害はないけれども視覚認知が発達していないお子さんがどんどん来るようになりました。

### 【橋詰先生】

いろいろなトレーニングを宿題でやってもらって、来たときは評価をして家で取り組んできてもらう。エラーが多すぎればレベルを下げ、ほとんど当たっていれば難易度を上げる。そのように課題を調整しながら続けていくと成果が出て、口コミでどんどん広がっていききました。

### 【橋詰先生】

視覚認知のお子さんって弱視児と同じで、漢字が苦手だったり、グラフや図形、定規の目盛りが苦手なお子さんが多いんです。だから、弱視児にやるような支援がそのまま使えました。漢字を部品に分けて指導するとか、音声化するとか。視覚認知を高めることと、子供に合った学習方法を工夫しようということの、二本柱になりました。

### 3 形骸化を超えて―「なぜやるか」を問い直す

---

#### 【橋詰先生】

私が赴任した頃は、過去の遺産をただ機械的にこなしているような雰囲気があったんです。「去年やっていたから今年もやる」みたいに、しっかり評価せずに、なぜやっているかわからないけれど「弱視児には視覚認知の指導を行う」と、形骸化していました。

#### 【佐藤】

他の学校でもフロスティングドリルをやっていましたが、なぜやっているのかそこまで明確ではありませんでした。あの頃でそうだったのですから、今であればなおさらこのことを伝えていく必要があると思います。

#### 【橋詰先生】

弱視児の全てに視覚認知トレーニングをしなければいけないかという点と違います。しっかり評価をして、視力が0.2や0.3であれば自然に育ってこることもあります。0.05や0.06くらいであれば育っていない可能性があるのも、そこはしっかり育てなければなりません。「みんなしなければいけない」となると、「なぜやるのか」の理解がおざなりになります。

▶ フロスティング (DTVP) は1970年代に開発された視覚認知検査・訓練プログラム。旭川盲学校へは藤原等先生によって全国で最初に導入され、北海道の弱視教育の一つの流れを作りました。

#### ◆ 次回予告（第2回）

第2回は「口コミで広がった教育相談の日々」をお届けします。保護者や医師との連携、遠方のお子さんへのメール相談、そして「うん、うん、と聞くだけ」という保護者対応の真意について、具体的なエピソードを交えてお聞きします。

インタビュー構成：北海道札幌視覚支援学校 佐藤暢洋・小松太一郎